

「未来をになう長浜っ子」育成プロジェクト 第3回ワーキング会議 議事要点録

I 日時 令和元年8月19日(月) 13時30分～16時50分

II 場所 長浜市役所本庁舎 3階 3-Bコミュニティルーム

III 出席者 清水香奈 委員 水上真哉 委員 池戸里江子 委員 沢村志穂 委員
落合明優 委員 藤井朋之 委員 大橋良平 委員 藤田淳子 委員
大窪景子 委員 嘉瀬井弘美 委員 雀部敬人 委員 教野直子 委員
【事務局】横尾教育委員会事務局次長、伊藤教育指導課長、三輪主幹、
長屋主幹、城楽学力向上推進員

IV 内容

1 開会 教育委員会事務局次長より開会のあいさつ。

- 全国学力学習状況調査の結果が公表されたが、皆さんの学校の結果もお聞きになっただろうか。長浜市も本年より市のホームページに平均正答数と正答率を公表した。
- 夏休み中、様々な研修で話を聞かれたことと思う。耳に優しい話は忘れがちだが、耳に痛い話は後々まで残りやすい。8月8日の県の読み解く力セミナーでの新井紀子先生の話もそうだ。機会があれば長浜市にも来ていただけないかと思う。
- 今日は先生方のお考えを幅広く出していただければと思う。よろしく願います。

2 説明およびグループ協議

(1) 先進地研修のふりかえり

茨木市教育委員会の取組と内田洋行の「未来の教室」での研修をスライドでふりかえる。
その後、視察研修で学んだことについて、グループ協議。

- 小中連携に行政も関わって推進されている。長浜でもやろうと思えばできる。
- 教育委員会と現場のしっかりした連携や中学校区毎の取組の充実等、市全体が一体となつての取組がよかった。実際の現場では、負担になっていないかなど、どんな課題があるのかも知りたいところ。長浜市ではやっているところもやっていないところもある。先生方が顔見知りになって、授業や子どものことを話し合う事はよいこと。負担にならない範囲で小中の教員が顔を合わせる機会があればよい。
- 行政と学校の間専任のコーディネーターがいることで、推進がよりしやすくなる。
- とにかくマンパワーが大事、人が必要。カリキュラムマネジメントを共同で行う等、近隣の学校とのつながりが大事だ。いろいろな事業をするには、長い期間、長い目で見ること、人もいるし、お金もかかる。
- 学力については、つまずきは低学年からある、低学年からの指導の充実が大事だ。
- 「未来の教室」のようなICT環境整備は現実難しいとは思いますが、最先端を知っておくことで、今後取捨選択するのに役に立つと思う。

(2) 長浜の子どもたちの現状について

平成31年度全国学力・学習状況調査の結果について、資料に基づき事務局より説明。
その後、長浜の子どもたちの現状について、グループ協議。

- 国語では、漢字、読み取る力、内容をまとめる力等が弱い。対策としては、文章に慣れる、意味調べの機会を増やす、図書館の活用、漢字検定をするなど目標を持った取

組、自分の考えをまとめる活動などが必要。

- 算数・数学でも問題を読む力が足りない、自分の考えを説明するのが苦手、九九などの基礎的な部分の積み上げも必要。
- 国語が弱い。算数もきっと(問題を)読めていないから全国平均より低いと考えると、やっぱり国語だなということになってくる。
- 何字以内で考えをまとめるなどの取組を続けてきたが、今ひとつ成果が上がらない。頻度が足りないのか、今までの取組をもう一度見直していきたい。
- 「何字以内で書く」、「アウトプットすること」、「読み解く力」を高めることに努力している学校もあると聞いた。どういう授業がよいのか、学力調査上位の県ではどういう授業をしているのかを知りたい。
- 「読み解く力」については、セミナーにも参加したが、自分で読めないとダメだということを知っていた。「読み解く力」については、情報を得ることと、得た情報を選択して分析して自分の力として身につけることが大事だというのが、このプロセスを繰り返していくと活用につながっていくのではないか。
- 漢字の書き取りの数値が低いことにショックを受けている。日々漢字についてはドリル的に練習を重ねているのだが、身につけていないということは基礎基本ができていないのか、文脈に応じた漢字が書けないということは応用的な力が弱いということなのか、精査していく必要がある。漢字の学習の仕方についても見直していく必要がある。
- 間違いの多かった漢字に「対象」があったが、普段は10問テストなどをやっているときは多分書ける。なぜ書けなかったのかというと、「対象」という言葉の意味がわかっていなかったのか、活用できていなかったのではないかと思う。
- 「語彙」については、系統立てて学校全体で取り組んでいかななくてはいけない。意味調べで辞書に付箋を貼っていくような地道な活動も必要。国語に限らず、日常から言葉を大事にしていくことが必要だ。
- 小学生の場合、学力テストの形式に慣れていない。例えば、過去問に取り組むことで慣れ、時間が足りず取り組めなかったということもなくしていく。
- 過去問等をやれば点数は上がるだろうが、(学力学習状況調査のための)対策は必要なのか。するなら、統一して行うべきだ。
- 学力調査で求められている力が必要なら、学校での普通の授業をごろっと変えていかないといけない。単元テスト(特に小学校で活用している市販のテスト)と学力調査があまりにも違いすぎていて子どもたちには抵抗がある。これから学力調査のような力が必要だとしたら、単元テストもそういうテストでないといけない。
- 学力調査、学校の授業が別々のものになっていて、学力調査の対策をするというと今やっていることにプラスしてそれをやらなければならないわけで、先生たちの負担感が増していく。今までやってきたことを変えようというと先生の抵抗がある。どっちつかずになっている。
- 学力調査の結果を見て、何とかしなければとは思いますが、実際自分の学校で何をすればいいかがわかっていない。他の学校の先生もそうなんじゃないかなと思う。変えるならみんなで変えていかないと難しい。
- 根本的に授業を変えていかなくてはいけない。
- 国語の教科を軸に、教科の壁を越えて学んだことを活用していくような授業改善に取り組む。
- 教師の評価はもちろん、子どもたち自身の評価も変える必要がある。例えば、書いたものを交流して読み合う時間でも、「声が大きくてよかったです」とか「丁寧に書いて

いてよかったです」みたいなものが多くて、内容に迫る評価にまでっていない。評価が変われば授業が変わり、授業が変われば評価も変わるというように表裏一体のものなので、セットで考えていきたい。

(3) 長浜の子どもたちに育みたい力について

第1回懇話会の概要について、事務局より資料に基づき説明。

その後、懇話会で出された意見をもとに、「学力」の捉え方や長浜の子どもたちに付けたい力・長浜の教育のあり方について、グループ協議。

- 世間一般と教員の学力の捉え方のイメージが違う。一般的に「学力」というと点数化できるもの、いわゆる勉強といわれるものだ。
- それに対し、「学ぶ力」というのは、人の一生を営む力、子どもたちに身に付けさせたい力だと思う。肝になるのが、自立・自律。自立は、自分の人生設計を立て、取捨選択しながら生業を立てる力。自律は、自分をコントロールする力、辛いことがあっても立ち向かっていく力。
- 「学ぶ力」をつけるために長浜市で何ができるのか。滋賀に来て10年になるが、この地の人の良さが財産だと思う。長浜市の子どもたちは素直で話もよく聞く。それは家族や地域の中で育まれているもので、小さいうちから知らず知らずに身につけている。自分自身、滋賀に来て働いて、働きやすいと感じている。人の気持ちを推し量るといったことに長けている。まだたくさん残っている地域の行事なども活用できる。では、全市的に学校で何ができるか、今後具体的に考えていきたい。
- 学校で培えるのは、土台になる「学ぶ力」だ。受験があつて、それを乗り越えて就職をし、将来を切り拓いていくことが大切だが、そもそも、忍耐力や目標を持つこと、生活力等のベースが整っていかないと受験にも向かっていけないと思う。最後まで取り組めなかったり、授業そのものに向かえなかったりする中で、そういう土台を地域、家庭、学校で作っていくことで、初めて見える学力のところに踏み込んでいけると思う。
- 長浜の教育のあり方としては、子どもたちは将来いろいろなところに出て行くかもしれないが、自分たちの育ったベースに地域や学校があつて、その後押しのもとに自己実現ができたらいと思う。
- 別のグループで土台という話があつたが、安心して学校へ行けることや自己肯定感といった土台の上に学力があり、その上に長浜のめざす子ども像などもコラボしながらみんなのものとしてひろげられるようなものが作れたらいいのではないかと。
- 現状、見える学力でいうと長浜はまだしんどいところを指摘されていると思うが、将来的には子どもたちが自立して今ある現実の世の中を生き抜く力をつけてあげたい。将来を見通す中で、見える学力も見えない学力もバランスよくつけられたらよいと思う。
- このワーキング会議がせっかく発足したのだから、この会がメンバーが入れ替わって10年とか続いていったら、教師の意識も高まるだろう、みんなが同じ目線でベクトルを共にし、取り組んでいけるとよい。

(4) 「未来をになう力」の見える化について

平成31年度全国学力・学習状況調査児童生徒質問紙項目を用いた指標をもとに、長浜市の子どもたちに身につけたい力（「未来をになう力」）について、事務局より資料にもとづき説明。

- 「未来をになう力」を、子どもたちも幼児も家庭でもわかるような言葉にするという
いるなところで活かせるだろう。
- 質問紙に基づく指標の下がっているものに着目した。「夢や目標を持っている」で、小
学生62%が中学生36%に下がっている。夢が抱けない子に動機付け（モチベーシ
ョン）をしてあげることが大事ではないか。持っていても感じていないこともあるの
ではないか、自分で気づけるためのアドバイスをしてあげることも大事だ。例えば「憧
れの先輩がいる」「試合に勝ちたい」というのも夢であること。
- 失敗を恐れず挑戦し夢を持つことについて、考える機会を設定することも大切。立志
式の先輩の姿のように。「こんなことをやってみたい」といった好奇心の持てる子を育
てる。好奇心を伸ばす学びをしていくことが夢につながる。

3 閉会 教育指導課長より閉会のあいさつ。

- 皆さんの生の声を聞くことは毎回大きな学びになる。様々なキーワードをいただいた。
教育委員会でも議論はしているが、先生方の議論はまた違った視点から刺激になる。
学力や学ぶ力に関して様々なご意見をいただいた。定まった結論が見つかるものでは
ないが、こういう議論を積み重ねることが必ずプラスになっていくと感じる。
- 間もなく2学期が始まると皆さんが子どもたちの前に教師と言う立場で立たれる。教
えるということを仕事として立たれるわけだが、次の一節を紹介して閉会とさせてい
ただく。
「教えるということ」（大村 はま）の「仏様の指」の章を音読。